



『進修』(上段右から復刊第1号、第3号)
『星座』(下段右から第1号、第3号)

土浦中学から土浦一高へ5 ～新生土浦一高～
旧制土浦中学校が創立50周年を祝った翌年の1948(昭和23)年4月、茨城県立土浦第一高等学校が発足しました。新たな高校づくりは、学校当局は勿論、県や文部省すらも全く手探りの状態で始まりました。
引用文中の【 】内は筆者による注記です。

無から有への挑戦

1948年度、新制高校が発足した一方で、旧制水戸高等学校をはじめとして、全国には官公私立39(文部科学省発行の『学制百年史資料編』による。)の旧制高等学校が、依然として存在していました。新制高校は、最早、旧制中学校ではなく、さればと言つて旧制高校でもなく、その新しい学校像をゼロから創造していくほかはありませんでした。

本校では、2学期制を導入しました。月曜日から金曜日まで毎日6時限授業です。その中で、ドイツ語の授業も行われました。新制中学校との差異を強調するためだったと思われませんが、そのドイツ語の授業について、中48・高1回屋口正一は、その著『櫻水物語(二)土浦一高元年』の中で、次のように述べています。
「ここに新しく週二時間の独乙語が登場する。唯一旧中学にはなかった科目で、石崎正雄教諭が担当した。テキストは星野慎一著・初級ドイツ語文典・第三書房発行で、文字はヒゲ文字であった。誰もが最初に覚えた文は、「ICH LIEBE DICH」だった事は言ふ迄もない。又、定冠詞の変化を「der des dem den」とお経の文句の様に唱へ、繰返した。

期末テストは、辞書持込自由のサブけた試験であった。結果は全員高得点で、多くのドイツ語ファンを生んだ。謹厳さうに見えたアンコー【石崎】先生、実に大物だったのである。

制度は始まってそれに伴ふ教材は間に合はず、手探り状態が続いた。それらを補ったのが、各科手作りのプリントであり、テストであった。当に無から有への挑戦と言つても良かったのである。教科書で生徒に渡つたのは、高等国語、生物、解析、幾何位のものに過ぎなかった。

部活動では、文化部には、郷土研究、科学、映画、弁論、文芸、美術部が、運動部には、庭球、水泳、野球、排球、卓球、送球部が創られ、学校としての形態が整つてきました。中でも排球部は、県体育大会で優勝して、10月の福岡国体に出場しています。

生徒会活動

11月4日と5日には文化祭が、8日には運動会が開催されました。また、13日には新講堂で、一高・二高の校友会が主催する、前進座による「ベニスの商人」が上演され、市内4高校(一高・二高・土浦市立高(現土浦三高)・土浦第一高女(現つくば国際大高))の生徒が鑑賞しています。

1949年3月1日には、1943年2月15日発行の『進修』(第46号)以来、久しく休刊していた『進修』(復刊第1号)が発行され、小田文雄校長は、

「...前略...一國の興廢は青年に負うところ大であるとはよく云われる言葉である。而して誠に現今ほど眞の意味に於て青年に期待するところ大なるはない。よくこのことを肝に銘じて、高度の知性涵養に邁進されん事を切に要請して巻頭の言に代えるものである。」と巻頭言を結んでいます。

高1回・中49回・併設中2回卒業

1949(昭和24)3月5日、卒業式が挙行され、高1回111名(1943年度入学)、中49回48名(1944年度入学)、併設中2回336名(1946年度入学)が、それぞれ卒業しました。その結果、旧制土浦中学生と併設中学生との姿が真鍋台の学舎から消え、土浦一高生だけとなりました。

高1回卒業の進学希望者は、新たに発足した新制大学の入試に挑みました。この入試に臨む受験生は、新制高校3年卒業生、旧制高校1年修了者、旧制大学予

科1年修了者、旧制専門学校1年修了者等と、実に多種多様で複雑でした。「進学適性検査」(大学進学にふさわしい適性・能力・資質を調べる検査。1947年度から1954年度まで、文部省の管理下で全国一斉に行われた。その内容は、文・理・一般、各問題種別に20問、計60問とし、検査時間は150分であった。)を受けていることが、国公立大学受験には必要となり、受験生には大きな負担となりました(可否の判定は、進学適性検査・学力検査・身体検査及び調査書の成績を総合して行うものとされた)。更に、この新制大学1回生は、4年後の1953年3月には、旧制大学最終回生と同時に卒業期を迎え、就職をする折にも厳しい競争を強いられることになりました。

中49回卒業生の進路は、就職(家業を継ぐことを含む)が殆どでしたが、後日、大学進学を希望する際には、新制高校卒の資格を取得しなければなりません(新制高校3年に編入してもらい卒業するか、大学入学資格検定試験に合格する必要がある)。

併設中2回卒業生は、土浦一高に進学した者、他の新制高校へ進んだ者(日比谷新宿・両国等の都立高校へ進学した者が多かった。中には大学で再び同窓生となる者もいた。)、就職した者、家業を継いだ者などに分かれました。転出した生徒が多かったためか、土浦一高では、新制中学校卒業生から1クラス分を新たに募集しました。4月7日に学力検査(国社数理)が行われ、119名が受験し、48名に入学が許可されました。

併設中から定時制への進学

併設中2回卒業から土浦一高に進んだ者の中には、諸般の事情から、定時制に進んだ者もいました。その1人である源田光也(併設中2回・定2回)は『進修百年』の中で、旧制中から併設中へ、

そして定時制へ、という本校での日々を次のように振り返っています。

「私達がこの学校【旧制土浦中学校】に入學したのは、この世に生を享けて以来、戦争に明け暮れた時代が、我が国の史上初めて経験する敗戦と云う形でやっと終わった約半年後の昭和二十一年の春でした。暗い混沌とした世情とは裏腹に、特に私は、大方の人より二年後れて、ようやく憧れの土浦中学に入學出来た喜びに胸を弾ませて、桜花爛漫たる校門を潜りました。当時は生徒の服装も区々【まちまち】で、多くの者は、海軍の戦闘帽に白線を二本巻いて学帽とし、道で先生に会った時は、海軍式の敬礼をするように指示されていました。校庭の隅には未だ防空壕が残っており、上級生の中には軍隊帰りの人も大勢おりました。

掲示された私の組は一年五組、担任は羽方稔先生とありました。：中略：

やがて私達は、新学制により併設中学の二年生となったが下級生は入學せず、【併設中3年生となつても下級生は入學せず】最下級生のまゝ、三年間の学校生活を終了しました。殆どの者は、そのまま現在の一高【全日制】に進學しましたが、一部の人はそこで学業を終えて就職し、又ある者は他の高校へ進學しました。私は父を亡くし、経済的な事情から、数名の同級生と一緒に、三年間一緒に学んだ皆んなに別れを告げて、前年度に設立された本校の定時制に進みました。その頃には実施されていた夏時間制のため、未だ陽の高い真鍋の坂を、その途中にある羽方先生の家の前を通って、汗だくになりながら、勤務先から学校へ直行しました。初めの頃は、途中で行き交う、ついこの間までのクラスメートと顔を合わせるのが、辛く、や、もすれば暗い気持ちにもなりがちでした。しかし、それぞれ職業も年齢も区々の人達が、学ぶ、と云う同じ

目的のために、夜、一堂に会する、そんな直向きな姿に、自分の甘い気持ちもいつしか消え失せていきました。

そして、創立以来男子校であった本校に、定時制だけ少数ながら女生徒を迎えて、新たな青春の息吹を感じ、それにもまして何より心強かったのは、引き続き、羽方先生、土井【鱗助】先生が授業を担当して下さったことでした。：後略：」

新制中学校からの入学生

1950(昭和25)年4月6日、新制中学校からの入学生を迎え、全日制にも、初めて女生徒6名が入學しました。2年生(高4回)にとつては、待ちに待った後輩でした。その喜びは純粹なものでしたが、「苦役」から解放されるぞ、という喜びもあつたのです。彼らは、講堂等の教室以外の清掃区域やプール掃除等(最下級生が担当させられた。)の苦役を4年間強いられました。が、彼らのその喜びも束の間、何しろ、新入生は民主主義教育の申し子で、清掃分担やプール掃除も平等原則で、主張し、全学年でやることになってしまいました。旧制中学の伝統に則つて後輩に気合いを入れてやる、と鉄拳制裁を加えた猛者もいましたが、先生に訴えられたため(旧制土浦中学生はそのようなことはしなかつた。その代わり、制裁を加えた先輩を武道場裏の便所等と呼び出して、やり返していた。)先生から叱責を受け、暴力行為で停学処分になつた者もいました(2・3年生は、今まで何の遠慮もなく、生徒に愛の鞭を加えてきた先生方の豹変振りに、面白くないものを感じていた。)

高4回・本校第24代校長大曾根宏亮は、「高5回生を迎えるまでは、殆どの生徒が旧制中学の入学生であり、土浦一高になつたとは言え、旧制土浦中学の校風が色濃く残っていました。しかし、高5回生

を迎えて、新制中学から民主主義教育を受けてきた生徒との違いを痛感し、土浦中学が完全に消えたと実感しました。」と述懐しています。

定時制での日々

学校教育法の一部が改正され、1950年度には、夜間課程と定時制課程とを1つにして定時制課程とし、修業年限が4年以上となりました。土浦一高に併置された夜間制高校も、4月1日、茨城県立土浦第一高等学校定時制として再発足しました。この年に入學した成嶋正芳(定3回)は、高校生活を振り返つて次のように記しています。

「戦後混乱の中、教育改革によって創設された『土浦一高』定時制に、私達は昭和25年4月に入學しました。入學した仲間、新制中学卒、併設中学卒として国民学校卒と年令も様々でした。特に、国民学校卒は、昭和19年に施行された学徒勤労動員令により、高等科生は工場に動員され、勉強どころではなく、卒業した時の頭は小学卒でした。その人達が、新制中学卒と一緒に机を並べて勉強するわけで、教える先生も大変でした。特に英語と数学とは、付いていくだけで精一杯。それでも、勤労学生に勉強の機会を与えられて入學した以上は、高卒の資格を指して頑張りました。私達の教室は、昼間部との併用で、薄暗い電灯の下、時には停電もあり、冬は達磨ストーブ一つを囲んで暖を取るなど、まだ施設が整備されていない環境の中、先生は熱心に講義され、私達も、昼間の疲れも忘れて熱心に教科書を捲っていました。

私達が4年生の時に生徒会が出来、部活にも参加し、秋には文化祭が開かれ、仲間が英語劇『ベニス商人』を上演し喝采を浴びました。また、『星座』を発売したりして、それなりに楽しく過ごしま

『ベニス商人』のキャストとスタッフ(左)とその舞台(右)



した。2回生の骨折【1952年、定2回源田光也らが学校側と交渉し、生徒たちの手で定時制初の修学旅行が行われた。】で実現した修学旅行では、第1日の伊勢で、【近鉄宇治山田駅の】集合時刻に遅れた一部の人達が、乗車駅を間違え【近鉄伊勢市駅から乗車した。】、幸い同じ電車に乗り合わせ、車中引率の土井【鱗助】先生に奈良までお説教を受けた事や給食のコッペパンや脱脂粉乳をおいしいと空腹を満たした事など、今では語り草となっています。このような環境の中で、熱心に勉強した仲間の内、国立大に5名が、私立大にも5名が進学し、その中の8名は卒業後教師の道を選び、次の世代の教育に当たられました。また、卒業後、様々な職場・地域で活躍した仲間から2名が、叙勲の栄に浴しています。これも、昼間部に負けまい、と頑張つた結果で、『花の3回生』と自負しています。この事は、4年間真鍋の坂を上り、また村落からペタルを踏んで、『春夏秋冬』厳しい季節の変化の中を通学した体験が、アイデンティティとなつて、卒業後の歩みの中で生かされたものと思います。：後略：(2013年度進修同窓会資料「卒業60周年謝辞」2013年4月14日)、(高21回 松井泰寿)